

終章 神崎町住民と財政の改革

神崎町の財政分析

千葉県地方自治研究センターがこうした形で、個別の自治体財政分析を公表するのは、茂原市の財政分析（『茂原市のきのう・きょうとあした-主として決算カード分析を中心として-』2011年10月、千葉県地方自治研究センター編・刊）以来2冊目である。

茂原市の財政分析は、当時の井下田猛研究センター理事長の企画・編著のもとで完成し、世に問われた。第2弾となる神崎町の財政分析も同様の体制で進み、完成の見込めるところまで作業は進んでいた。しかし不幸にして、井下田理事長は4月、急の病に斃れた。本書が井下田理事長の問題提起の構成通りの形で刊行されるのは、残された者の大きな喜びである。

2冊目となる本書は、前回の経験を活かして深化した部分がある。執筆分担に、神崎町職員労働組合自身に関わり、資料・材料の提供だけでなく、財政分析に直接主体的に携わったこともその一つだ。自治体財政分析は決算カードを中心に、ともすれば、標準的な分析手順が確立されているような印象を受けるに違いない。しかし、そうではない。いかに財政指標を精緻に分析・比較しようとも、指標が表現することにはばらつきがあり、自治体によってその意味合いは異なってくる。指標は多くの場合、財政をこのようにすべき、という（普通は国・総務省の）政策意図を表現したものであり、無批判に受け入れることには慎重でなければならない。町職の主体的な参加は、財政指標による分析の批判的な解明の第一歩となる。財政分析は財政分析批判でもある。多くの神崎町住民が分析に参加し、討論する機会ができれば、さらなる深化が期待できる。

特徴

本書は「小さな町の豊かなまちづくり」と題される。確かに小さな町なのだ。人口6,520人（2013年10月1日現在）。千葉県内町村の平均人口は13,000人弱。全国町村の平均人口も偶然に千葉県とほぼ同じなので、千葉県内でいっても、全国でいっても平均町村人口の約半分。首都圏ではとくにかなり「小さな町」である。その町が「豊かなまちづくり」を目指す。ネックは財政規模となる。一つの施設建設は、小さな町の財政を揺るがす。2011年の東日本大震災は小さな町に甚大な被害をもたらした。財政構造の変化をきたした。

神崎町の財政指標は、良と悪が入り交じる。さらに一つの事業・一つの災害で、良と悪とが入れ替わる。財政規模の小ささのゆえであるし、財政基盤の弱さのために、国・県からの補助金、地方交付税の変動の影響をもろに受ける。本書では、財政指標分析に加えて、制度的な分析も加えてある。人件費関連の職員一人当たりのマイクロ指標は（総務省にとって）最悪の部類（もちろん職員個人にとっては良い）だが、効率関係の指標は良い。負債関連は中位の状況である。

評価

こうした制約の中で、まちづくりが進む。当然のことながら、運転注意が求められる。より計画的に、より合意形成を重視して進められなければならないのは、財政基盤の観点から必須のことがらとなる。

こうして分析は現状、制約、結論を積み重ねてできあがってきた。神崎町に現れる指標の特徴についても把握が進んだ。財政構造に関する予測的手法についても理解が進んだと思う。次はこの結果に基づいて、一つ一つの事業の評価を検証しなければならない。まちづくりはつまるどころ、分析に基づく予測（アセスメント）と評価、合意形成と決断のサイクルなのだと思う。その役割を私たちの財政分析は果たしたいと思う。